『増岡敏和全詩集』解説

二十一世紀に生きる増岡敏和の詩世界

佐相　憲一

一

ヒロシマで妹を殺された無念の青年・増岡敏和は民衆のサークル運動から詩人になった。彼を評価し熱心に励ましたのが峠三吉だった。やがて青年は全国の平和と民主主義・社会進歩の運動を励ますベテランになっていった。彼の詩は鋭いが、身近に息づく人間の鼓動があり、社会的弱者を見つめる目は温かい。信頼のまなざしに支えられて、伸びやかに共にうたう希望の詩世界は、もうひとつの戦後詩と言えるだろう。

常に溢れるばかりの平和の心をうたい、常に文学のつながりの中心にいて他を励まし、常に庶民のたたかいと連帯の先頭に立ち、常に何事も率先して切り拓く、それでいて楽天的な笑顔から柔らかい抒情が漂っている。そんな心優しい熱血漢が日本の戦後の詩運動にいた。

彼はまめな批評家であり、励ましの名手であり、サークル運動の天才であり、幅広い分野の社会科学知識をもったオルガナイザーであり、すぐれて大衆的なアジテーターでもあったが、それでいながら、彼自身の詩作品は、驚くほど素直で優しいうた心と抒情が持ち味だった。そこには激しい政治闘争が反映しているにもかかわらず、ほとばしる内在リズムが対話性に富み、人間の生きた声が親しく伝わる。

いま、二十一世紀、原発問題で原子力そのものが問われており、ヒロシマ・ナガサキの人類的教訓とも結びつけて語られている。戦後市民によって脈々と築きあげられてきたアジア友好・反戦非戦平和の心が、歴史の風化を思わせる政治家や出版界の昨今の危険な復古調によって踏みにじられようとしている。平和憲法も改悪の危機に立たされている。

また、格差社会などさまざまな社会問題が深刻の度を増し、殺伐とした冷たい社会風潮のもとで、傷ついた心の問題もクローズアップされている。

そんないまの世の中で、峠三吉らの反戦詩運動を継承し続け、厳しい現実認識の社会派でありながら、読み手を突き放さずに共にうたった抒情感性の増岡敏和さんの詩業は、人間の体温に満ちた先駆と言えよう。

二

自ら大衆の中に生まれ、良き大衆性を失わなかった現代詩人・増岡敏和さん。その気さくで饒舌な語り口の奥に常に感じられる内省の声は、資質だけによるものではないだろう。そこにはこの詩人にとっての決定的契機が強く関係している。

妹・玲子さんの一九四五年八月ヒロシマ被爆死である。時に玲子さん十三歳、敏和さん十六歳（十二月に十七歳）。

詩人の胸は、すべての社会問題、すべての世界問題を考察する時に、またすべての愛する人々を思う時に、必ず、玲子さんの被爆死を通っていくように思われる。生活を共にして、時にぶっきらぼうに接してしまったかわいい妹。死んで初めてその愛着が、絶望的に浮かび上がってきたのだ。

最も根源的なところで繰り返されるのが、作者が青年の頃の、別れの会話となった妹のセリフ〈あんちゃん　生きて帰りんさいよう〉の情景である。

生きて帰れなかったのは玲子さんの方だった。

幼い頃、いっしょに相撲をとった時の、玲子さんが兄の胸で泣くシーンも痛切だ。玲子さんの原爆当日の様子と死ぬまでの足どりをたどろうとする兄の戦後は終わらない。

何歳になっても増岡さんは繰り返しこうした情景に佇み、妹にもっと優しくしてやればよかったという思いと、八月六日に留守番で広島にいた妹といなかった自分の生死が分かれたことの複雑な思いを抱き続けた。そして、原爆を落としたアメリカと、アジア太平洋侵略戦争に国民を狩り出した日本の絶対天皇制軍国主義への怒りは、彼の平和思想の原点だった。

その原点が増岡さんの人間存在全体を揺り動かし、彼は詩を書かずにはいられなくなったのだ。彼は行動せずにはいられなくなったのだ。

そのように、常に少女・玲子さんの影と共に人間存在を感じながら、戦後社会を生き、たたかっていくから、増岡敏和さんの詩世界にはどんなに激しい民衆闘争の現場が刻まれていても、同時に常に身近な弱い人間に語りかけるような優しさがあり、血の通ったぬくもりがあり、内省の翳が伴っているのだ。

この全詩集に繰り返し現れる印象深い情景はほかにもある。

軍人タイプではなく親しい家庭人であった父が、仕事の関係で海外に行くと戦場に駆り出されてフィリピンであっけなく戦死。お父さんをめぐる言葉には親しみが満ちていて、作者の快活さはどうやら父親譲りでもあるらしい。

恩師である先駆的思想の教師・三谷藤四郎が、治安維持法の世の中にもかかわらず、ひそかに日本はじきに負けるから学生は学問にうちこめと言って、軍国少年の作者が海軍予科練習生に志願したのを悲しんだこと。戦後、作者はこの恩師のもとに再び出向き、社会科学の眼を身につけて、活動家となっていく。

戦後、母子家庭を生き抜くために苦労して働いていた母と

の対話は特にリアルで胸をうつ。若い作者はレッドパージで迫害され、職を転々としながら世のため人のための実践活動に奔走する。その節目節目で母との対話があり、時に衝突しながら常に想い合う母と息子の情景が、時代背景と共に生き生きと描かれている。作者自身の世帯をもつようになってからの東京の増岡一家と広島の母との交流も温かい。

年上の原爆詩人・峠三吉との出会いと共に展開した詩運動は、戦後まもなくのサークル詩運動と平和運動の生き生きとした証言となって、詩群にもその友情がにじみ出ている。峠三吉が死んだ時の様子をリアルに描いた散文詩もあり、苦楽を共にした広島の若い日々から峠三吉の死後の作者の長い歩みの中まで、生涯胸の中で共にたたかい共にうたった存在だったと言えよう。

妻や息子や孫との情景も忘れられない。若い頃から常に死に囲まれていた作者にとって、自ら平和な家庭をつくっていくことには、平和な社会をつくっていくことへの情熱に負けない強いこだわりと信念があった。だから、息子誕生をめぐる日々のドキドキを一冊の詩集にまとめたり、孫との日々をまた一冊の詩集にまとめたり、そしていつも隣に妻がいることが詩に感じられるのだ。

これらすべての情景が示していることは、増岡さんの詩は人間の詩だということである。〈にんげんをかえせ〉と詩に書いた峠三吉と、ここで深くつながっている。

三

一九五二年の第一詩集から二〇〇五年の第十四詩集まで、また詩集未収録の詩群を含めて、旺盛に語られた貴重な戦後の証言、あふれるばかりの人間愛で語られたいくつものたたかい、幻想のように遠くに見えながらリアルな対話の情景。

増岡さんの詩から強く感じるのは、人間が好きだという連帯行動のさわやかな向日性と、哀愁さえためらわない愛のリリシズムである。

命を失うことのせつなさ、共に生きていることの大切さ、他者存在に連帯することの大切さ、そういったものが増岡さんの詩の根底にある。

いろいろな読み方があるだろうが、初めてこの詩人の詩を読むという方々には、まず二〇〇五年刊行の最後の詩集である第十四詩集『永代までも言問わむ』を読まれることをおすすめしたい。ここには増岡敏和さんの生涯に渡る詩業の本質が特によく出ていて、彼ならではのスケールと内容と手法で人間の真実が切実に描かれている。まるで、これが最後の詩

集だと予感していたかのような一冊だ。そして、この詩集を読まれた後に、若い頃の第一詩集から順番に読んでいかれるといいかもしれない。

二篇の詩を全篇引用しよう。一つ目の「馬は嘶き鈴が鳴り」は、七十代の二〇〇二年の詩集『茜』に収録されている作品である。二つ目の「原爆で殺された玲子」は、二十代の一九五六年の詩集『明日への眼』に収録されている作品である。その間の長い歳月を貫くものが表れている。時代背景や生きた人間の姿を伴って、共感がひろがる作品と言えよう。

馬は嘶き鈴が鳴り

馬に鞭打ち疾風（はやて）のように
駆け戻る男に重ねて　私も
小声で歌に合わせた
音楽喫茶「ともしび」に行くたび
メインテナーの長谷川清に　いつも
「郵便馬車の馭者だった頃」をリクエストした
まさか　私の妹に
不幸が見舞うなど思いもしなかったが
ふいに空が裂け　太陽が弾けて
閃光に灼かれた骸を抱え上げることも出来なかった
遠いむかしだが思い出すと　胸がつぶれる
長谷川は　突如　歌をとめ
会場を鋭く一瞥して
「皆の衆」と野太くおらぶのだ
――あの娘（こ）が死んだ
母の無言のあの尖った嘆きが　いまも
この歌に繋がって　私の弔いを深くする
眼裏にひろがる空の果てまで
馬はいななき　鈴が鳴り……

（詩集『茜』より）

原爆で殺された玲子

玲子
ここに署名簿がある
原爆禁止の訴えに
こたえられた数百の名前が書かれている
兄さんが集めたのだ
兄さんの名前が
いちばんはじめに書いてある
原爆で殺された玲子
今年なら十九歳
おまえは健康で美しい娘さんだ

家をきれいにしてくれて
兄さんのシャツにも
アイロンをかけてくれて

玲子のそんな澄んだ瞳を抱いて
兄さんは　原爆と戦争に
こめた呪いで街が栄えるよう
署名を訴えたのだ

兄さんが
おまえと同じくらいの娘さんに
署名してもらった街角で
あるいはしゃんとしたお婆さんが
一家全滅のかなしみを
憎しみにかえられた署名簿の前
その街のどの角で
おまえは頭をぶっつけたか
おまえは誰に会い
誰と抱き合って逃れていったか

誰に会っても
ぶくぶくの赤むげのひっくりかえった眼の
かつて人間であったとおもわれる幽霊
泣くことさえできぬ

つぶされた少女の胸は
まっくらでまっくらで
走っただろう
這っただろう

人間がながれている
そこが川だ
走るのはもういや
おまえは流されることを求めたろう
むこうは海だ
青い海だから
そこへ行きたいとだけ考えたろう

玲子
原爆を落さなくとも
広島の人々を皆殺しにしなくとも
帝国日本は崩れたものを
解放にむかう
ソヴェト軍の進撃をおさえるために
日本を自分のものにしようために
実は落したもの
しかし彼らはしらじらしく
きれいごとをならべたてる
原爆を落したから

平和が早くきたんだと
また　おなじ論法で
朝鮮にも原爆を落せば
平和がくるんだと

玲子
原爆で殺された玲子
もう戦争はいやだと
誰からも教えられず
そのつぶやきを口にもったとき
おまえのいのちは終っていったが
平和へのねがいが
いまここにこうも積まれていて
川筋の柳の枝々は
天にむかって芽ぶいている

黙ってはならない
黙ってはいないぞと
ここに兄さんの名前につづく
数百の人々の意志があり
世界中の幾億の人々の名前とともに
編みこまれた歌がある
この歌はいつか
原爆よりも大きく爆裂するぞ

（詩集『明日への眼』より）

四

本全詩集には、日本国民やアジア民衆や世界の人々が体験した重要なたたかいがぎっしりつまっている。それも記事や論文を読むのとは違って、詩人・増岡敏和というたぐいまれなうたい手の人間内部を通って展開されているから、私たちは戦後という長い歳月の、その時々の「いま」を当時の生きた人間の声でたどることができるのだ。

日本の学校教科書は近現代の比重が軽くて問題だとかなり前から指摘されている。日本の民衆が権力側に都合の良い日本論に誘導される形で、特に第二次世界大戦のアジアの中の日本の事実と、戦後社会の細かな諸相をあまり知らずに育っていった世代が多くなっていることは、昨今の日本政治の右傾化と深い関わりがあり危険である。

そんないま、この増岡敏和全詩集を読めば、一九四〇年代終わりから一九五〇年代、一九六〇年代、一九七〇年代、そしてその後のこの国の真の国民的たたかいの軌跡、勝ちとられていった権利と平和運動の成果、うまずたゆまず連帯の炎

を燃やし続けた人々の努力がどう暮らしに活かされていったか、権力がいかに運動をつぶそうとしてきたか、そこにどんな苦悩があったか、世界の人々と日本の人々はヒロシマ・ナガサキの心でいかに世界戦争への企みを止めてきたか、などが生き生きとうたわれているから、新鮮だ。

どんなたたかいが詩に刻印されているか、ざっと挙げてみよう。

① 原爆を伝え、平和へ向かうたたかい……広島出身であることや肉親の被爆に加えて、作者は峠三吉らとの広島のサークル詩運動から始めて、その後は「原爆と文学」誌の全国運動などの中心になったこともあり、多くの被爆者とじかに接する機会をもった。その証言をたくさん詩にしている。生前、彼は自分が広島出身者でありながら直接被爆者でないことの「負い目」をしきりに口にして原爆の詩をあまり書いていないかのように謙遜していたが、いまから見ると、こうして実に多くの詩作品に結晶させており、これらの詩群は世界文学的な意義をもつだろう。後期には意識的にこの問題を主題にした詩集も次々と出している。また、彼は日本国憲法第九条を守り生かし真に実現する意志を記した詩も多く書いている。全詩集いっぱいに、増岡さんの平和の詩の心が躍動し、仕事が刻印されている。

② 朝鮮戦争の頃の日本の方向転換との平和のたたかい……戦争放棄の平和国家をめざすはずの戦後日本が、一九五〇年からの朝鮮戦争を機に、占領アメリカ軍の前線基地の国として、世界の戦争にまきこまれていくことになる。そのさなかの一九五〇年十一月にアメリカのトルーマン大統領が発言したのが朝鮮半島での原爆の使用計画であった。このことは現在の比較的若い世代の多くの日本国民は知らないのではないだろうか。当時は世界的な大問題になった。そして、とにかく核兵器使用を止めさせようと、すでにその年の三月に国際平和運動が発していた「ストックホルムアピール」が威力を発揮するのである。世界世論に押されて、アメリカは朝鮮半島での原爆投下をあきらめた。詩には、増岡青年が仲間たちと「ストックホルムアピール」署名を街頭でつのる姿が生き生きと刻まれている。なかなか集まらない苦悩もリアルだ。朝鮮戦争は泥沼化して現在の同一民族二カ国に分断されるが、ともかく原爆使用は世界世論の力でくいとめたのだ。運動が実際に世の中を動かしたのだ。それも現在の多くの日本国民は知らないか忘れているだろう。この頃の青年たちの路上行動などを書いたことは貴重だ。

③ レッドパージに典型的な思想差別と弾圧とのたたかい……映画の巨匠チャップリンが赤狩りされたことはよく知られているし、最近亡くなったアメリカの著名SF作家レイ・ブラッドベリがSF小説の中でアメリカの赤狩りを風刺したことも知られている。しかし、日本に赤狩りがあることは、戦前のことは小林多喜二などでよく知られているが、戦後の朝鮮戦争時にレッドパージという国民的大問題が実行されたことさえ、いまの若い人たちには伝えられていないだろう。ましてや、現在も大手企業などで差別があり、それを許さない広範なたたかいが裁判で勝利したりしていることなどは、異常に偏ったマスコミやインターネットでは知らされていないだろう。たとえば、現在多数の国民が怒りたたかっている脱原発の運動であるが、電力会社でもずっと差別とのたたかいがあって、ごまかす企業の嘘を許さない共産党員たちがいたのである。思想差別や弾圧がなければ、原発ももっと早く止められていたかもしれない。さて、この詩人・増岡敏和さんは、レッドパージの体験者なのだ。詩にあるように不当逮捕まで体験したそれは苦しいもので、人生そのものが狂わされかねない国家の非道ぶりが明らかであった。増岡さんはしかし、たたかった。まじめな国家公務員だったのに職を転々とさせられて、それでも負けずに持ち前の人間エネルギーですぐにどこでも仲間ができて、彼はどこでもみんなの笑顔の中心になって、世のため人のためにたたかうのである。心配する母を描いた詩群は泣かせる。レッドパージとのたたかいが詩になっているのはすごいことだと思う。「列島」「荒地」などの詩人たちもすぐれていたが、ここにはもっと大衆的な地べたの社会現実の先端の声が響いている。いま、大阪や東京では公務員や教員の思想統制が大問題になっている。歴史の生きた教訓をこの全詩集で強調したい。

レッドパージの関連では、松川事件のでっちあげを許さないたたかいも詩に刻まれている。戦後有名な冤罪事件である松川事件において、当時の広範な国民運動が冤罪被害者たちを支援していた空気が記されていて貴重だ。彼らは死刑にされてしまうのだろうかとハラハラしながら作者が出勤すると、いち早く知った若い娘たちが「無罪よ」と共に歓喜する、そんなシーンが印象深い。

④ 日米安保反対闘争……安保反対闘争の現場が詩に描かれている。現在に続く従属的な日米関係と危険な米軍基地の無法状態を決定づけた一九六〇年の日米安全保障条約には、広範な国民が反対した。国会を囲む抗議のデモの大きさは日本の現代史上空前の国民運動であった。三十代はじめの増岡さんが積極的な関与でそこにいたことは当然のことだった。しかし、詩群に描写されているように、国民の平和的デモをかく乱する暴力的な挑発者が現れ、権力側の警察に弾圧の口実をつくらせてしまう。詩人はこれら双方の暴力とたたかい、日本の真の独立と平和のために現場に立った。

その後、一九七〇年の安保改定反対闘争では、いよいよ暴力挑発の要素が強まり、広範な国民の安保破棄運動はつぶされてしまうのだ。それでも増岡さんは「挫折」せず、その後も一貫して日本の真の独立と平和な道のために第一線でたたかい、詩を書いた。

⑤ベトナムへの連帯……泥沼化した悲惨なベトナム戦争において、日本政府は日米安保条約のもとに侵略アメリカ軍を支援したが、日本の国民多数はベトナムの人々の側に立っていた。なかには私の故郷・横浜のように地方自治体まるごと反戦平和の行動をして国と対峙したところもある。米軍に枯葉剤を撒かれるなどしても屈せずについに勝利して独立を果たしたベトナムの人々の喜びは世界中の反戦平和・民族自決の喜びであった。そんな歳月に、詩人はベトナムの人々のたたかいを詩に書いている。

⑥沖縄の心のたたかい……戦争における沖縄の悲劇や現代の米軍基地による住民被害を描く際にも、増岡さんの見る眼は確かである。単なる「沖縄を返せ」ではない。沖縄独自の感情、沖縄の人たちの文化の誇りを何よりも大事にして、そこに寄り添っている。批判はアメリカに対してだけでなく、日本国家にも向けられているのだ。第二次世界大戦における沖縄地上戦の悲惨は、沖縄の住民が、敵とされたアメリカ軍だけでなく、味方であるはずの日本軍によっても苦しめられた点にある。琉球の母子などに日本軍のための玉砕自害を強制する情景など、忘れてはいけない歴史の事実が証言をもとにリアルに描かれているのだ。そして、現代の沖縄米軍基地の無法を告発するとともに、増岡さんは琉球のうたごころを我が心として沖縄生活文化をうたっている。これも二十一世紀に生きる視点だ。

⑦東京大空襲を刻印する……広範な平和運動を実践した増岡さんは、ヒロシマ・ナガサキと並んで東京大空襲をも無差別市民大量殺害の一つとして重視していた。証言などをもとに一九四五年三月一〇日のことを詩にしている。

⑧愛やこどもたちを守るたたかい……ここに増岡さんの詩のもう一つの大きな特長が生きている。周囲の反対を押しきって、広島と東京の遠距離恋愛を実らせた作者と妻の若い日を描いた詩は初々しい愛の詩だ。そして、自分自身のこどもたちや孫たちだけでなく、さまざまな社会問題を描く時にも彼の詩にはこどもや男女青年がよく出てくる。そこには作者の人間愛がにじみ出ていて、民衆の素朴な願いを大切にする増岡さんの人格が詩に感じられるのだ。いまの多くの家庭のお母さん、お父さんにも共感されるだろう優しさがある。

⑨地域医療現場の運動……増岡さんは民医連という地域医療の民主的発展のために東京中を奔走し尽力した功労者というもう一つの大きな顔をもっている。その世界の人々にとって、増岡さんという人は民衆の命と健康を守る運動の事務と組織運動に尽くした偉大な存在なのである。その分野の著書もずいぶん刊行している。詩の中にも若干職場の人々が出てくる。ただ、残念なことは、民主的医療運動が取り組んできた諸問題を細かく詩作品にすることはなかった。もし増岡さんがさらに長生きしてくれたなら、この分野を主題にした詩集なども書いていただきたかった。

⑩現代的な内省抒情や連帯のうたを現代詩の中で実践したたたかい……すでに述べたように、この現代詩人は現代詩人でありながら現代詩がとかく軽視しがちであった傾向を発展させた貴重な詩人である。社会をリアルに見つめる批評眼と骨太な思想をもちながら、同時に優しい人間の心をうたい、時に哀愁さえ漂わせながら、対話性の連帯の詩をほとばしらせ、内省的な抒情詩も書いた。増岡さんの詩は内側から書かれていながら広く外の世界に開かれており、対話には人間を愛してやまない心がある。平易な言葉を用いているが、行の連なりには独自のリズムがあり、深いうたがある。

ほかにも多くの現実が本全詩集に反映されている。こうした多面的な彼の詩世界から、すべてを象徴するような作品を一篇全文引用しよう。一九八五年の第七詩集『広島の女』の巻頭詩である。

序詩　歌　――被爆二世H子への祝婚歌として

「人生に大切なものはごく僅か」
といったある詩人のことばはほんとうだ。
信じられないことの多すぎると嘆きをいうより、
信じられるごく僅かな大切なものを
確実に掬いとっていくことを。

「夫婦はいつも二心異体でありたい」
といったある作家のことばはほんとうだ。
二つの個性が鮮やかにであう長い日々がなければ、
どんなにやさしい眼をして座っていても
育てるものはなにもない。

「人間は人間の未来だ」
といったある哲学者のことばを
いまこそほんとうのものにすることだ。
ナイフのように流れる歳月のなか、
一つの恋唄をかざして。

（詩集『広島の女』より）

五

ここで、時代の制約という問題について書いておきたい。

ここまで述べてきたように、増岡敏和さんの詩は時代と正面から向き合い、過去の死者の影が伴う形で明日に向かういまのうたであり、社会の中の人間の連帯と個人の内省が重なり合った、切実なものであった。そのように先駆的でもあった増岡さんの認識も、激動の戦後の一時期には時代の制約・時代の限界のもとにあった。

それは、旧ソ連や故・毛沢東などへの見方に表れている。

増岡さんも実践した日本の革新運動の認識の変化の概略を記しておこう。

戦後、ナチス・ドイツなどのファシズムを倒した連合国の一つの旧ソ連と、日本の侵略から脱して一九四九年に革命独立を成し遂げた中国への、尊敬と憧れが日本の進歩的な人々の間にあった。衛星中継やインターネットなどの現在と違って海外情報に限界のある時代であった。この二つの国は素晴らしい社会主義国なのだろう、きっと働く人民の自由が世界一なのだろう、と多くの人々が信じていた。しかし、現在では明らかなように、旧ソ連はスターリンの頃から本質的に社会主義とは相いれない方向へと変質していた。中国でも革命当初は新しい社会をつくる民衆自身の力で頑張っていたが、次第に毛沢東の独裁恐怖政治へと変わっていき、旧ソ連も中国も、日本をはじめとする世界の革新運動に公然と干渉するようになったのだ。

ところで、日本の侵略戦争に反対し、民主主義の世の中を主張した日本の共産党は、戦前の絶対的天皇制と軍国主義に徹底的に弾圧されたが、戦後晴れて合法化され、若者たちの人気を集めていた。しかし、労働者をはじめとする民衆の運動の盛り上がりと、在日米軍の朝鮮戦争出撃などの時代の激変を受けて、アメリカと日本の政府は一九五〇年代に共産党関係への大弾圧を実行したのである。その時に、まだ未熟だった日本の共産党指導部が動揺して二つに分裂する。非合法状態に焦った片方は武装闘争という当時の日本の実情には合わない決定的に間違った路線を唱えるのだが、その背後には毛沢東の中国共産党がいた。もう片方はこれを批判し、そちらの流れが一九六〇年代以降現在までの日本の共産党となっていく。その後、朝鮮戦争が休戦し、弾圧は解除され、共産党の分裂状態も誤った方の自己批判をベースに解消され、日本の自主独立の民主主義的路線が確立されていまにいたっている。中国共産党は毛沢東の文化大革命の影響で一九七〇年の日米安保改定反対運動の時にも日本の運動に干渉し、日本共産党を敵視して極左暴力勢力を支援するなどしたため、権力の暴力的弾圧を招き、運動はつぶされた。日本の共産党はこの中国の干渉を厳しく非難し、以降関係が断絶した（その後、中国側が反省したため、いまはゆるやかな交流がある）。旧ソ連も日本の革新運動に干渉し、時にはスパイまで使って、日本の共産党を敵視した。理由は、日本共産党が自主独立の路線で、ソ連の大国主義的誤りを公然と批判したからであった。日本の共産党は旧ソ連を社会主義とは無縁の抑圧の体制だったと現在規定している。

こうした経緯の中で、増岡さんは若い頃、「スターリン星」という詩（第二詩集収録）を書いて旧ソ連を信じたが、自らの社会運動実践の中で次第にソ連の恐ろしい実態を知るようになり、その人生の半ば以降はソ連の横暴とたたかうスタンスに認識が発展したのである。

また、初期の詩篇に盛んに出てくる毛沢東への敬愛も、やはりその後の自らの運動実践の中で幻想が崩れ、批判的になっていったのである。第六詩集に収録されている「ランソンは諒山と書く」という詩は貴重な資料ともなっている。これは、独立を果たしたベトナムを、社会主義を名乗っている中国が武力侵略した事件を題材にしている。増岡さんは、真実を伝えるためにベトナム民衆に連帯して現地取材していた日本の「赤旗」記者が中国兵士に狙撃されて命を落としたことを怒りをこめて書き記している。

北朝鮮の実態も時代の変遷の中で明らかになってきたことである。増岡さんは詩集の中で韓国を「南朝鮮」と呼んでいるが、かつて暗黒の軍事独裁政権だった韓国（南朝鮮）への認識は事実を反映していた（いまの韓国の飛躍的な民主化からは信じられないほどの暗い体制だった）が、北朝鮮国家への批判的認識はそれほど見られない。これも時代の限界と言えよう。

だが、その一方で、日本の植民地支配や差別に苦しめられた在日朝鮮人に関しては、リアルに共感的に描かれていて、こちらは先駆的である。

いま述べたような時代の制約・限界はそれとして、十四冊の詩集と未収録作品の全体から見る詩人・増岡敏和さんの詩世界は、人の命を大切にする平和と民主主義、社会進歩の視点、そして庶民のくらしに連帯する世界的な視野を大きな特長とするものだったと言えよう。

六

私が増岡敏和さんと積極的な交流をし始めたのは二〇〇〇年だった。それ以前の一九九〇年代から同じ詩人会議会員で知っていたこともあり、何かの折に、彼が編集していた年間文芸誌「原爆と文学」へのお誘いをいただいたのである。当

時私は関西に住んでいたのだが、「詩人会議」投稿欄などに詩が掲載されていて、大阪詩人会議「軸」などにも詩を発表して、新聞投稿欄の入選なども含めて、三十代はじめの平和に関心のある書き手だということに注目してくれたらしい。お誘いを受けて、私は張りきって詩を書いて送った。翌二〇〇一年三月に刊行された「原爆と文学」二〇〇一年版である。その後、終刊の二〇〇七年版まで七年連続で、私は増岡さんとごいっしょすることができた。増岡さんがそうであるように、私もまたこの平和の文学運動をとても大切に考えていたし、読んでもらえるように広めもした。

「原爆と文学」終刊号（二〇〇七年版）の「あとがき」に増岡さんは次の言葉をのこしている。

〈本誌は一九七二年七月に創刊、毎年一回刊（千冊～二千冊）で六年後中断、一九九五年再刊以後今号まで続刊してきました。その初めは作家の山口勇子（故）の発案で私が編集担当で長年やってきましたが、多くのなかまのお力添えで一定の成果を上げることが出来ました。篠垤潔、田川時彦（故）、横川嘉範、小森香子、堀ひろじ（故）、橋爪文、三上満、渡辺力人、四国五郎、館要介（故）、山岡和範、宮本勝夫、山本隆子、日高のぼる、山本英典、佐藤一志、伊藤文市、須田稔、伊谷周一、吉田一人、真実井房子、佐相憲一、吉森康夫、川口広志、夏目侑子・・・各氏らに特に。（以下略）〉

大阪時代、私からは詩誌「すきっぷ現詩人」「軸」「進化論」などを送り、増岡さんからは「日曜」などが送られてきた。この詩誌交流は熱心な批評を伴い、その頃の「日曜」の読者便りを見てもらえれば、私の日曜評が時々見られるし、「すきっぷ現詩人」の感想集には増岡さんからの批評が見られた。

増岡さんの批評にどれだけ励まされたことだろう。私自身の詩のみならず、同人や会員のさまざまな傾向の詩を本質のところでよくとらえ、さかんに励ましてくれた。私もまた、増岡さんのやり方に学んで、誠実さと本質を読みとることをこころがけ、他者の詩を文章で批評するという道を深めていったのである。当時大ベテランの増岡さんと、意気込んでいた新鋭の私は、驚くほどに理解し合えたと思う。一九二八年生まれの増岡さんと一九六八年生まれの私であるだけに、そのことに感動した。詩の書き手であることと、批評者であることと、詩運動家であること。そういったタイプという点で、若かった私にとって最も参考となる実践を示してくれた一人が増岡さんであった。編集畑にも足を踏み入れていた私はその面でも増岡さんに励まされた。

そうしたことの前提に、私が増岡さんの詩世界に批評性と抒情性と生きたリズムの語り口という、親しい魅力を発見していたことがあった。

驚くべきことに、私たちは一度も対面したことがない。にもかかわらず、大阪時代から私が最も近く感じていた詩の世界の一人が増岡さんであった。増岡さんの方でも、私の詩集をH氏賞に投票したとか言って私をびっくりさせたり、手書き文字でぎっしりの熱い便りをくれるのだった。だが、私が東京へ転居した二〇一〇年、増岡さんは亡くなった。一度でいいから、いっしょに酒を飲みたかった。

そもそもの出会いのきっかけとなった「詩人会議」にとっても、増岡さんは大きな存在だったと言えよう。めぐりめぐって、私はいま詩人会議の副委員長を務めている。

今回、年譜を作成するために、増岡さんの妻・頼子さんのご協力で、一九六三年から晩年二〇〇〇年代までの「詩人会議」バックナンバーを見ていく作業をした。新鮮だったのは、増岡さんは詩人会議初期からすでに貴重な書き手であり、毎号のようにサークル詩運動論や原爆詩のことや仲間の作品評を書き、詩を書き、座談会などは何度も登場していて、親しい笑顔の写真が載っている。詩、評論・エッセイ、書評、座談会（誌上合評会）、投稿欄の選者、詩集賞の選考委員、と五十年近くの大活躍だったのである。

私が日頃ごいっしょしている詩人会議の方々には初期からのベテランもいるが、彼らの若い頃の写真と共に増岡さんの写真があり、共に言いたい放題の活発で楽しい議論を誌上座談会で展開しているのは、とても新鮮である。こんな風に増岡さんは詩人会議の長年の書き手であると同時に、批評上手な縁の下の力持ちであり、歴代の編集部に頼りにされていたのである。

この全詩集の刊行を詩人会議の古くからの人たちも喜んでくれるだろう。

また、二十一世紀のこれからの詩人会議が彼の詩業を伝え続け、彼の尽力を今日的に引き継いでいくために、私も努力を惜しまないだろう。

以上の特別のいきさつもあり、今回のこの全詩集刊行は、私自身にとっても特別の感慨を伴うものである。私は責任をもってこの本を後世に遺したい。それだけ今後の日本・世界に生きる大切なものを書いてきた詩人である。

おそらく、私のほかに、少なくない関係者が似た思いをもっていることだろう。さまざまな彼の所属詩誌の同人たちや交流した現代詩人たちはもちろん、増岡さんの人間的吸引力はさらに遠くまでのびているだろう。

今回の刊行呼びかけ人を募る際に分かったことだが、民医連の人々もこの全詩集に特別の関心を寄せてくれているし、平和運動の方々も普及に協力してくれるという。

そうした声を励みに、この本を広く新しい時代に伝え続けていきたいものだ。

七

歴史の紆余曲折を経た激動の中で、増岡さんの願っていた方向へ日本と世界が向かうなら、どんなにすてきなことだろう。

それは命を大切にする道である。民衆の暮らしを大切にする道である。武力よりも対話を大切にする道である。詩などの文化を大切にする道である。夕焼けを見て感じる感性がおしつぶされない道である。愛をうたう道である。

最後に、数ある中でも私が特に好きな作品「薔薇の降る町で」を全篇引用して、この文章を終える。

増岡敏和さんの詩が、これからもますます広く読まれることを願いながら。

薔薇の降る町で

天から薔薇が
無数に降ってきて
夕霞となり　この町を
紅紫色に染めていく

やがていちめんが淡く溶け
たゆたう波も静まって
木の葉が　その水底を
そよそよ泳いでいる

幼い孫娘も爺の手を離れ
ほそい足を尾鰭にして跳ね
夕霞の裾を乱しながら
人魚のように泳いでいく

青さが僅かに残っている
空は傾いていき　水が流れる
美しい韻をもつものもないのに微かな
響きが秘密のように届いてくる

いつか風景は　私の
少年時代の古里にかさなり
原爆死した妹の港に辿りつけなかった
歳月を　拾っていたら

「詩は行為に身をかえる」と言った
ベッヒャーの詩句*が唐突に浮かんだ

ならば　私のこの淡い憂愁さえも
「人間の賛歌」にと　目を放つと

天から薔薇がなおも降ってきて
紅紫色のなかの一点となり
手をあげて　孫娘は
薔薇を摑もうと跳びはねていた

＊「憂愁の暗いひびきさえ人間の賛歌だ、ぼくはそういうおまえの詩人だ」（ベッヒャー）という詩行がある

（詩集『茜』より）

峠三吉の精神を引継ぎ発展させた人

『増岡敏和全詩集』に寄せて

鈴木　比佐雄

1

二〇一〇年八月三日の増岡敏和氏のお通夜に参列した時に、広島・長崎以外で二度と核兵器を使用させてはならないという考えで詩作する「原爆詩運動」の実態を明らかにする上で、増岡氏の詩的活動の全貌を残したいとの気持ちが私には湧き上がってきた。戦後日本において多くの詩人たちは、広島・長崎への原爆投下の悲劇を記して、核兵器を廃棄させる思いを実現したいとする様々な詩作や詩運動を試みてきた。その詩運動の一翼を増岡氏や山岡和範氏たち広島から上京してきた詩人たちが担ってきた詩的運動を明らかにしたいと考えたからだ。原民喜や栗原貞子らの被爆者のリアリティのある原爆詩の継承はとても大事なことだ。と同時に直接に被爆していなくとも、日本の民衆を大量殺戮するために原爆投下が実行されたのであり、二度と世界のどの国の民衆にも原爆は投下されてはならないという「原爆詩運動」は、峠三吉が一九四八年に広島で始めた詩誌「われらの詩」が原点であるだろう。その創刊号には増岡さんの詩「外は嵐」と「無題」の二篇が収録されている。その後も増岡さんは経済的な理由で法政大学を中退し広島に戻り職に就き、峠三吉の傍らで「われらの詩」の中核的な存在で詩作や評論を続けた。また峠三吉が一九五三年に亡くなった後にも「われらの詩」や新たな詩誌「われらのうた」を創刊してその試みを継続した。一九五六年には赤木健介氏の紹介で上京し、「サークル」詩運動を実践していった。「われらのうた」十七号の「文学サークル運動の覚え書き」などはその実践的な運動から生み出されたものだろう。増岡氏の上京によって、広島での詩誌の中心は一九五七年に「われらの詩」の仲間であった御庄博実氏たちによって創刊された「火皿」に移っていったのだろう。広島から離れても決して広島原爆を語り継ぐことを忘れることがなかった増岡氏や山岡和範氏は、「起点」、「日曜」、「原爆と文学」などの雑誌や「詩人会議」を通して東京周辺及び全国の詩人に峠三吉の精神をより広範囲に伝えることを使命としたのだろう。

また「原爆詩運動」において峠三吉周辺以外で最も自覚的に重要な歴史的な働きをしたのは、浜田知章氏と長谷川龍生氏らの詩誌「山河」の活動だった。一九五二年には「山河」十二号で「原爆詩特集」を組み、米国が行った無差別大量殺戮に対する人道上及び国際法の観点から戦争責任を追及した詩篇を掲載した。浜田氏の詩「太陽を射たもの」や長谷川氏の「追う者」は「原爆詩」の傑作であった。浜田氏は広島の悲劇を伝え広島の平和思想を「ヒロシマの哲学」として世界に発信すべきだと提唱したのだ。コールサック社が『原爆詩一八一人集』（日本語版・英語版）を刊行できたのは、浜田氏のこの「ヒロシマの哲学」を原点にして日本中の詩人に呼びかけたからだ。私は日本人の心ある詩人の「集合的無意識」には「原爆詩」が存在するのであり、その「集合的無意識」に呼びかけて「原爆詩集」を実現したいと構想したのだった。

2

増岡敏和さんと初めて親しく交流も持ったのは、先に触れたコールサック社が二〇〇七年春に公募した『原爆詩一八一人集』に増岡さんが詩「鳴る」で参加してくれたことだった。私は増岡さんの名前を見て、学生時代に古本屋で購入し愛読している評伝『八月の詩人―峠三吉の詩と生涯』を書いた詩人・評論家だと気付いたのだ。すぐに電話をして参加してくれたお礼を伝えながら、増岡さんの他の詩篇も拝読したいので詩集を読ませて欲しいとお願いしたのだった。私も詩論集『詩の降り注ぐ場所』を送るとその中の「戦後詩と内在批評」の中の〈7　「青い光」と「本当の記憶力」〉で峠三吉などの原爆詩人たちへの評論から「新しい示唆を受けました」との便りを貰った。また他の章に出てくる詩人たちの評価について感銘を受けたとも語っていた。増岡さんは私の戦後詩の根本的な問題意識を論じようと試みた詩論を受けとめてくれてだけでなく、評価も共通するものがあると私は知り心強いと感じたのだった。

増岡さんが編集発行している総合雑誌「原爆と文学」は当時大阪にいた佐相憲一さんから送られていたこともあり、増岡さんの所には「コールサック」を送ってはいたが、直接的な交流はなかった。しかしその後は、コールサック社が企画する二〇〇九年『大空襲三一〇人詩集』や二〇一〇年『鎮魂詩四〇四人詩集』にも参加してくれたので、その度に電話をしてお話を聞かせてもらっていた。二〇一〇年にコールサック社から『山岡和範詩選集一四〇篇』が刊行された時に増岡氏はとても喜んでくれて、書評を「コールサック」に書いてくれる予定だった。けれども体調が思わしくなくそれは実現しなかった。それから私は何とか増岡氏を後世に残したいと思い始めて、全詩集か少なくとも山岡氏と同じようなコールサック詩文庫を勧めたいと考えているので、お会いしたいとお手紙を書いた。すると奥様の代筆のお葉書がすぐに届いた。体調が悪いので、お会いするのはまたの機会との心配りある丁寧な葉書だった。しかしその葉書が届いて四、五日で増岡さんの訃報を聞いたのだった。お通夜に参列した畏友の山岡氏の増岡氏への鎮魂詩はとても心に染みた。増岡氏が関係していた民医連の多くの青年や関係者達が来ていて、増岡さんはこの民医連でも大きな仕事をされていたことが分かったのだった。

私は増岡さんの峠三吉を後世に残すための評伝や詩人論、詩や小説などの創作活動を通して行った行為は、峠三吉を語る際にもっとも必要な文献だと考えている。今度の全詩集は増岡氏の創作活動の詩作に関しての全貌が明らかになり、峠

三吉が増岡氏をどうして評価し信頼していたのか、また増岡氏がいかに峠三吉の精神を引継いで発展させようとしていたかが浮き彫りになってくるだろう。峠三吉の精神を発展させた試みは、「サークル詩運動」の根幹となる考え方をその現場から汲みあげて理論化しているのだ。その意味では主義主張と行動がこれほど一致している詩人は珍しいと思われる。

3

全詩集は、既刊十四冊の詩集と未収録詩を合わせた四六四篇と評論三編、増岡氏への追悼文三編、解説文三編、年譜から成り立っている。詩篇に関しては、「原爆で殺された玲子」のような十三歳で被爆死した妹玲子と、子を探して入市被曝した母の悲しみが全ての詩篇の背景にあり、その思いは年を経るごとに深まっていったように思われる。四国で予科練の少年兵として無傷だった自分が許せない贖罪の思いが消えることがなかったように感じられる。民衆を無差別に殺戮した原爆を憎む精神がこれらの詩篇を書かせたのだろう。そして原爆後の世界でいかに個人の自発性を尊重させて芸術活動をして豊かな時間を過ごしていくかを理論化し実践していったのだ。戦後に政治活動をして獄中に入れられその獄中生活の苦労を弾き飛ばす逞しい詩「元気で出てきました！」などもある。一方戦後直後のスターリン時代の熱気を伝える政治的な詩もある。それは多くの強制収容所が存在したソビエト国家の実像が伝えられていなかった以前の時代の限界を示す貴重な証言といえる詩である。増岡氏が民衆そのもので時代に翻弄される姿も垣間見られる。それから広島・長崎と同じことがベトナムで行われているとアメリカを批判して、原爆を投下された日本と枯葉剤を撒かれたベトナムを連帯させていく思考をしている詩篇も重要だと思われた。そのような経験を踏まえて社会主義国家であったとしてもベトナムを侵略した中国を批判し、米国だけでなく民衆の側に立たない社会主義国家への批判もしていくようになっていく。その意味で増岡氏の詩篇を通して人間や環境を破壊する原爆の今日的な問題点と戦争と平和を考えて実践した詩人の試行錯誤の在り様をリアルに受け止めることが出来るだろう。また民医連に関わり民衆のための病院作りやその運営に深く関わっていくことも峠三吉の死や多くの被爆者の死を見つめて、医療現場の大切さを痛感したからだったろう。増岡氏の詩は詩人や詩の愛好者だけでなく、原爆・原発問題や平和運動に関わる人びと、医療現場の人びとやその関係者にも読んで欲しいと願っている。